

## ■ 提 言 ■

## 第 52 回日本小児感染症学会総会・学術集会に向けて —われわれは今、パンデミックの中で働いている—

川 村 尚 久

第 52 回日本小児感染症学会総会・学術集会会長/大阪労災病院小児科

2019年12月に中国湖北省武漢市に端を発した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は急激な勢いで感染者数が増加,世界各地に拡散したCOVID-19は特に欧米で深刻な状況となり,WHOは2020年3月11日にパンデミック宣言を出しました。現在,全世界の感染者数は約400万人,死者は約30万人になっています。特に米国,英国,イタリア,スペインなどでは感染者数の急増とともに多くの死者を出し,さらにアフリカや南アメリカを含めて世界全体が深刻な状況となっています。国内でも感染者数は日々増加し,2020年4月7日には緊急事態宣言が発出され,大阪府を含む7都府県が指定を受け4月16日には全国に指定が拡大されました。その効果から国内感染者数の減少傾向が認められ,緊急事態宣言は5月末頃までとされました。小児科医にとっては,高齢者に比べ小児の重症例が少ない事だけが幸いですが,このような国内状況において,指定医療機関だけでなく,一般の医療機関においても感染者を診療せざるを得ない状況になり,防護具や消毒薬の供給不足や院内感染の発生により,逼迫した医療現場の状況下に,日々皆さんご勤務されていることと存じます。

この度,2020年11月7日(土)・8日(日)の2日間に亘り,グランフロント大阪・ナレッジキャピタル・コングレコンベンションセンター&イベ

ントラボを会場として,第52回日本小児感染症学会総会・学術集会を開催させていただくこととなりました。医育機関でない一般病院の私に,このような機会をいただきました事を大変光栄に存じております。2020年大阪での日本小児感染症学会の開催は,日本小児ウイルス研究会と日本小児感染免疫研究会が統合された1987年の第19回(牧淳会長・大國英和副会長)以来の33年ぶりであり,大阪医科大学小児科学教室としては,1972年の第4回日本小児感染免疫研究会(西村忠史先生)から48年ぶりとなります。かつて感染症診療・研究の中心であった大阪で33年ぶりに,また2003年国内で唯一SARSコロナウイルス感染者が判明した大阪で,COVID-19パンデミックの中,開催する事に責任の重大さを強く感じております。

2019年,百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録されました。本総会ではその前方後円墳を鍵穴に見立て「感染症の問題点を解く鍵」,大阪城を「子どもたちを守る砦」という,小児感染症および感染免疫の知識と治療を再確認する機会にしたいと思ひこのテーマにいたしました。会場はJR大阪駅の北側に隣接しており,アクセスは大変便利です。大会のプログラム委員には,大阪の5つの大学の小児科や阪神間の基幹病院の先生,日々大阪の子どもたちの感染症診療をされている先生を中心に“チームほぼ大阪”として,COVID-19関連のテーマはもとより,斬新な企画や有益な講演を

準備しています。日本小児感染症学会が法人化されて最初の総会・学術集会でもあり、色々な意味でそれにふさわしい変革が求められている大会かもしれません。

本総会・学術集会は11月初旬の開催であるため、現時点で予定通りに開催する方向で準備をすすめております。しかし、今後のCOVID-19流行状況の推移により、学術集会は、プログラムの変更、発表形態の変更、WEB配信などの可能性を、

総会につきましては、WEB会議などが余儀なくされる可能性も考慮しております。いずれにいたしましても、まだ先の見えない状況下での判断であり、今後も万全の準備をいたします。皆さまのご理解とご協力を賜りますよう、どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。開催内容の変更が生じた場合には順次ご案内させていただきます。

最後に、皆さまくれぐれもご自愛のうえ、お過ごし下さい。

\* \* \*